

英国 ロンドン

OLYMPIA The London
International Horse Show



世界の乗馬ファンを魅了する オリンピア・ホースショー観戦記

馬乗りなら一度は見たいという憧れのホースショー、オリンピア。

毎年クリスマス前の1週間、英国ロンドンで開催される。

2017年度は12月12～18日の日程で行なわれた。

私はフリーダム・ライディング・クラブ(FRC)のメンバーとツアーを組んで
クリスマスモード漂うロンドンを訪れ、華麗なホースショーとともに
女王陛下の庭 ウィンザー・グレートパークでの外乗も楽しんだ。

文・写真=田中雅文(フリーダム・ライディング・クラブ代表)



110年の伝統を誇る 英国屈指のホースショー

オリンピア・ホースショーの「オリンピア」とは、ロンドン西部 ウェストケンジントンにある国際見本市会場の名称。歴史は古く、1885年に建てられた。ガラスと鉄骨で作られた巨大な建物で、大ホールは150m×85mという広さ。最初のオリンピア・ホースショーは1907年、時の国王エドワ

ード7世とアレクサンドラ女王臨席のもと開催された。今回で110年の伝統を誇る、まさに英国を代表するホースショーだ。

馬好きの英国の子どもたちにとってオリンピアは、クリスマスに欠かせないイベントとなっている。オリンピアは親から子どもへのクリスマスプレゼントであり、クリスマスショッピングの場なのだ。

世界各地から集まった馬術選手は皆、口を揃えてこう言う。「みんなオリンピアが

大好き。クリスマスをロンドンで過ごすのは素晴らしい、最高の雰囲気だ!」

英国の障害選手 ローラ・レンウィックにとっても、オリンピアは特別な場のようなのだ。彼女は、「どのクラスにせよ、オリンピアで勝つのは特別なこと。子どものころ、ポニークラブのメンバーとしてオリンピアに来るのは、その年のハイライトでした。ジョン・ウイテカーやマイケル・ウイテカーを憧れの目で見ていましたね。今、自分が彼らに



日本では見ることができない、馬車競技。大迫力!

対抗してジャンプしているなんて、いまだに信じられません」と、キラキラした目で語った。

開催期間中の来場者総数はおよそ9万人。クリスマス前の1週間、ロンドンの街は馬関係者で一杯になる。

毎日のショーの最後に行われるのが、音と光の一大スペクタクル「オリンピア・クリスマスフィナーレ」。ソリに乗ったサンタクロースが登場し、ポニークラブのジュニアライダーとプロのダンサーたちが華麗なダンスを披露。最後は満場の観客も参加して、皆でクリスマスキャロルの大合唱。こうしてオリンピア・ホースショーは、大団円を迎えるのだ。



会場が一体となる、オリンピア・クリスマスフィナーレ。

世界のトップライダーが集結！ 障害・馬場・馬車の競技会

FEI(国際馬術連盟)公認、ワールドカップを含む3種目(障害、馬場、馬車)の競技会が、世界レベルのライダーを集めて連日開かれた。

障害競技には国民的人気を誇る ウイテカーファミリーが出場

ジョン(62歳 ※開催当時、以下同)とマイケル(57歳)のウイテカー兄弟、彼らの甥のウィリアム(28歳)が今年も活躍した。国民的英雄ともいえるウイテカーファミリーの人気は根強い。連日、競技に出場した彼らへの拍手は、優勝者をしのぐほどだった。

14日(木)「Santa Stakes-Part 2(150cm)」ではマイケルが3位、ジョンは15位、ウィリアムは19位。15日金曜日の「Snow flakes Stakes(145cm)」でジョンは5位、ウィリアムは21位、マイケルは29位。

15日(金)の「Father Christmas Stakes(145cm)」ではジョンが優勝。



ジョン・ウイテカー。(写真提供:Olympia)



エドワルド・ガル。(写真提供:Olympia)



パトリック・キッテル。(写真提供:Olympia)

馬場馬術 グランプリ優勝は オランダのエドワルド・ガル

12日(火)に行われた「FEI World Cup Dressage Grand Prix」は予想通り、オランダのエドワルド・ガルがグロックス・ゾニック号に乗って優勝。スコアは76.680%。

13日(水)の自由演技(キューア)「FEI World Cup Dressage Freestyle」で優勝したのは、スウェーデンのパトリック・キッテル、乗馬はデラウナイ・オールド号。前日のグランプリで優勝したガルは3位。



4頭の馬 + 3人のチームプレー 大迫力の馬車競技

4頭立ての馬車に3人の選手が乗り、障害物が置かれたコースを巧みに駆け抜けてタイムを争うのが、馬車競技。日本では行われておらず、その迫力とスピードには度肝を抜かれる。

3人の選手のうち、手綱を握るドライバーが1人、馬車の後ろにバックステッパーが2人という構成になっている。バックステッパーの役割は、カーブで体を大きく乗り出して馬車のバランスを保つこと、ナビゲーションと時計を見ながらペース配分をドライバーに伝えることだ。

今大会では、ボイド・エグゼルがドライバーを務めるオーストラリアのチーム

が活躍し、14日（木）の「Extreme Carriage Driving」で優勝、15日（金）

の「FEI World Cup Driving Leg」で2位という好成績を残した。



迫力溢れる馬車競技。

ここでしか体験できない興奮と感動！ 数々のエンターテインメント



ポニー競馬 Shetland Pony Grand National

オリンピックならではの 雰囲気やワクワク感も魅力

実は私がオリンピックを観に行き続ける主な理由は、馬術競技の観戦でもショッピングでもない。馬術競技会にはほかでも見られるし、ショッピングにもあまり関心がない。

では何かというと、オリンピックでしか見ることでできない数々のエンターテインメントと、会場の独特な雰囲気が好きなのだ。

定番のロンドン警察騎馬隊によるカドリール、子どもジョッキーによるポニー競馬に加え、世界各地から毎年特徴あるグループが招かれる。これまではロシアのコサックライダー、ポルトガルのルシターノライダー、「フライング・フレンチマン」として知られるロレンツォなどが、その素晴らしい騎乗を披露。今年は南米チリのカウボーイチーム「The Chilean Huasos」が初登場した。

カール・ヘスターによる 馬場馬術マスタークラス 「Masterclass with Carl Hester」

人気プログラムのひとつが、カール・ヘスターによる馬場馬術の講習。グランプリホースの作り方を披露するマスタークラスだ。

乗り手は何と、シャーロット・デュジャルダン。8歳のハノーヴァリアンの牝馬 マウント・セントジョン・フリースタイル号とともに、馬場に登場した。なおバレグロ号を引退させたシャーロットは、今回の競技には選手としては出場していない。

カール・ヘスターは、パッセージ、ピアップフェといった技術的解説に加え、馬のメンタルコントロール、ライダーに必要な強い体幹などについて解説。わずか15分ながら実に内容の濃いセッションだった。

フリースタイル号とシャーロットのコンビは、2018年のグランプリに登場予定とのこと。チケットが早めに売り切れるだろうと今から話題になっている。



カール・ヘスターによる馬場のマスタークラスは、人気プログラムのひとつ。

チリのカウボーイチーム 「The Chilean Huasos」の熱演

2016年、チリのカウボーイ「ワッソ（Huasso）」とダンサーたちはBAFTA（英国アカデミー賞）表彰式で、エリザベス女王90歳の誕生日を祝う特別公演を開催。大好評を博し、今回のオリンピックにも招待された。

チリの牧畜の現場で活躍するワッソと馬だが、現代においては国技のロデオなど、さまざまなセレモニーに欠かせない存

在となっている。スペインやポルトガルから中南米に伝わったカウボーイ馬術は、それぞれの国で独自の発展をとげた。彼らは民族音楽に乗せて、ダンサーの踊りとともに巧みに馬を操る。独自の音楽や踊りと結びついた、伝統芸能にもなっているのだ。

驚くべきは、ワッソの馬たち。なんと、横にギャロップする。牛を追うための動きだということだが、その動きはスペイン、ポルトガルの騎馬闘牛の馬をしのぐとも思われる。



横にギャロップする馬たち。



民族音楽に合わせて、人と馬が舞う。



オリンピック初登場の、チリのカウボーイたち。

犬のアジリティー（障害物競技） 「The Kennel Club Dog Agility」

オリンピックには馬だけでなく、犬も登場する。ドッグ・アジリティーは犬の障害物レースだ。

イギリスの乗馬シーンに、犬は欠かせない。ハンティングの際は馬に乗ったライダーとともに、何匹もの犬が同行する。牧場では、多くのシープドッグやキャトルドッグが活躍している。何より、英国を代表する乗馬雑誌の名前が『Horse and Hound』であることから、馬と犬のつながりがうかがい知れよう。



巧みに障害物をくぐり抜ける犬。



騎馬警官のカドリール 「The Metropolitan Police ACTIVITY RIDE」

ロンドン警察騎馬隊の精鋭部隊によるカドリールは、オリンピックでしか見ることができない。「ACTIVITY RIDE」は騎馬警官のスキルと馬の調教度を示すデモンストレーションとして、1950年に始まった。

観衆の大声援、興奮の渦は、スター選手が登場する馬術競技に負けず劣らず。騎馬警官と馬による妙技の巧みさ、その裏でどれだけのトレーニングを積んだのか、馬乗りなら分かるはずだ。

そもそもイギリスの警察が馬を使うようになったのは18世紀後半、ハイウェイマン（馬で公道に出没したおいはぎ）を取り締まるためだったという。ロンドンの街角で

は今でも、騎馬警官の姿をよく見かける。日常のパトロール、イベントの警備、要人のエスコート、デモの鎮圧といった任務だ。

イギリスの人々が騎馬警官に寄せる信頼は厚い。



障害物を飛び越えながら上着を脱いだり着たりする技。



紙の壁を突き破る。一体どうやって馬に教え込ませるのだろう？



いつの間にか鞍を外して高く掲げながら、次々と障害を飛び越えていく。



10頭の騎馬が猛スピードですれ違いながら、火の輪をぐり抜ける。



ショッピング・ 展示コーナー

競技会場に隣接するショッピング・展示コーナーには250ものショップやブースが立ち並んだ。馬具の価格は日本の3分の1～4分の1。帰りのスーツケースが2つになるほど、買い物を楽しんだメンバーもいた。



ずらりと並んだショップや展示ブース。



馬具屋は数知れず。



馬房に掛けるネームプレートをその場で作ってくれる。



ロンドン警察騎馬隊のブース。新人を募集している。



ジュエリーショップもたくさん。「これ全部私がデザインしたの」



なんとボルシェも売られていた。

オリンピック観戦の翌日は



ウインザー・グレートパーク 元・英国王室の狩場へ外乗に

2日間オリンピックに通った翌日は、女王陛下の庭「ウインザー・グレートパーク」で乗馬を楽しんだ。ウインザー城の南西に広がるこの広大な公園は、もとは英国王室の狩場。面積は576万坪と、とにかく広大のひと言。皇居は外苑全体（迎賓館や赤坂御苑を含む）で69万坪だから、いかに広いかが分かるだろう。

ウインザー・グレートパークは、そのほとんどが市民に

開放されている。ルールを守れば、誰でも散歩や乗馬をすることができる。私たちは近くの乗馬クラブの馬を借りて、外乗を楽しんだ。



ジョージ3世(18世紀の英国国王)の銅像。遠くにウインザー城がかすんで見える。



広大な庭園の中を行く。

INFORMATION

FRCでは今年もオリンピック・ホースショー観戦ツアーを行なう予定。日程は2018年12月17日(月)～23(日)。期間中、2日間はオリンピックを観戦し、ウインザー・グレートパークでの外乗も実施する。2018年のオリンピック・ホースショーでは、愛馬バレグロを引退させたシャーロットが新馬・フリースタイル号で競技に出場するだろうとのことで、早くからチケットの売り切れが予想されている。ツアーのご予約はお早めに。

フリーダム・ライディング・クラブ (FRC)

●URL / www.freedomridingclub.com

●問い合わせ先 /

Email : frc.freedomridingclub@gmail.com